

自給飼料を活用した交雑種去勢肥育牛の肥育技術					
[要約] 耐暑性が異なるイタリアンライグラス品種の混播による多回刈栽培体系を策定した。また、生産されたサイレージを交雑種去勢肥育牛の粗飼料として活用する給与体系を確立した。					
担当部署	家畜部・肉用牛チーム 畜産環境部・飼料チーム			連絡先	092-925-5232 092-925-5177
対象作目	肉用牛・飼料作物	専門項目	肥育	成果分類	技術改良

[背景・ねらい]

交雑種去勢肥育牛は黒毛和種牛に次ぐ高品質牛肉生産基盤であり、その産肉能力を活かした肥育技術の開発が望まれている。また、年々増加する転作水田等を活用し自給飼料を生産する技術の開発が求められている。自給飼料を交雑種去勢肥育牛の粗飼料として活用するには、安定的な自給飼料生産技術を確立するとともに、生産された自給飼料の適正な給与水準を明らかにする必要がある。

そこで、本県の基幹自給粗飼料であるイタリアンライグラス(IR)を用いた新作付方法および生産されたサイレージ(IRWS)の給与が交雑種去勢肥育牛の産肉性に及ぼす影響について検討し、自給飼料生産と交雑種去勢肥育牛を組み合わせた高品質牛肉生産技術体系を確立する。
(要望機関名：畜産課(H11))

[成果の内容・特徴]

1. IRの超極早生品種「シワスアオバ」と晩生品種「アキアオバ」を混播することにより、IR単一草種で長期利用が可能となる多回刈栽培体系を策定した(図1)。
2. この体系により開花期のIRWSを生産した場合、乾物収量2.1t/10aが期待でき、生産コストは乾物1kg当たり約29円となる(図1)。
3. 交雑種去勢肥育牛を用いた高品質牛肉生産のためのIRWSの給与体系を策定した。(表1)。交雑種去勢肥育牛の粗飼料としてIRWSを給与すると、高品質牛肉生産に必要な栄養水準を満たすことが可能となり、稲ワラの場合よりも濃厚飼料費を約3%削減できる。
4. この体系においては、交雑種去勢肥育牛の飼養規模が100頭の農家で、IRWSは乾物量で37,641kg/年が必要となり、作付面積は180aが必要となる。

[成果の活用面・留意点]

1. 交雑種去勢肥育牛を用いた高品質牛肉生産のための技術指標として活用できる。
2. 開花期のIRWSを収穫する場合、1番草による収穫はできない。

[具体的データ]

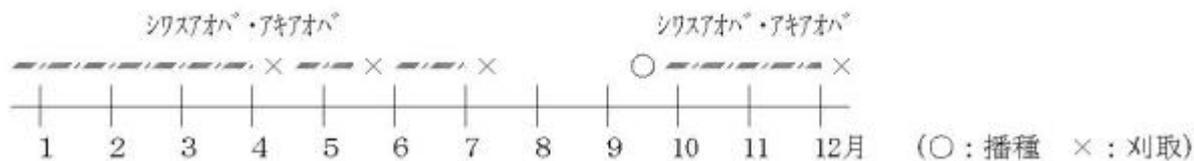


図1 イタリアンライグラスサイレージによる多回刈栽培体系

注) 「シラスアオバ」と「アキアオバ」各々播種量はそれぞれ 1.5kg/10a。

表1 交雑種去勢肥育牛における自給飼料給与時の栄養水準と給与例

肥育期		肥育前期						肥育中期						肥育後期				
増体	生後月齢	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
	目標体重 (kg)	211	249	288	328	368	408	446	483	518	551	582	611	638	662	685	706	724
	DG (kg/日)	1.28		1.28				1.02				0.71						
栄養水準	TDN (DM%)	72		75				78				80						
	CP (DM%)	16		15				13				12						
	NDF (DM%)	35		35				25				20						
	粗飼料：濃厚飼料	25：75		25：75				15：85				12：88						
飼料給与例 (乾物)	自給飼料(IRWS)	2.0		2.5														
	稲ワラ							1.4				1.1						
	圧ぺんトウモロコシ	1.4		2.7				3.3				3.3						
	圧ぺん大麦	0.0		0.0				0.9				1.9						
	一般ふすま	3.7		4.2				1.3				0.9						
	増産ふすま	0.0		0.0				1.9				1.9						
	大豆粕	0.6		0.6				0.5				0.3						
	炭酸カルシウム	0.1		0.1				0.1				0.1						
	総乾物量(kg)	7.8		10.1				9.4				9.4						

[その他]

研究課題名：地域の特産品種別自給飼料基軸型肉用牛生産技術指標の策定

予算区分：国庫助成（先端技術）

研究期間：平成14年度（平成14年）

研究担当者：古賀鉄也、井上信明、藤吉弘子、稲田 淳、磯崎良寛、棟加登きみ子、馬場武志

発表論文等：九州先端技術地域実用化研究促進事業報告書